立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院生研究
２００５年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　観光学　研究科　観光学　専攻		
指導教員	所属･職名	氏　名	
	観光学部・教授	安島　博幸　印	
自然・人文の別	自然　・　人文	**個人・共同の別**	個人　・　共同　名
研究課題名	客船施設からみたレジャーライフスタイルの変遷		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	観光学研究科・観光学専攻・博士課程後期課程４年	臺　純子　印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	観光学研究科・観光学専攻・博士課程後期課程４年	臺　純子	
研究期間	2005　年度		
研究経費	200　千円		

研究の概要（200～300 字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究では、近代から現代にいたる社会、特に社会階層とその構造の変化がレジャーライフスタイルに影響を与え、それによって客船内の施設が変化したという影響モデルを想定し、オーシャンライナーからクルーズシップにいたるまでのデッキプランを分析対象として、客船施設の変化とレジャーライフスタイルの変化、さらにはその背景要因となる社会変化について考察することを目的とした。

研究の結果、クルーズの大衆化において、オーシャンライナーの１等船客向けに造られた空間、たとえば大階段のある空間構造や食をめぐる空間がモデルとされてきたことが明らかになった。さらに上位階層のレジャーライフスタイルをモデルとして模倣する過程において、大階段のように本来の意味が変化したものがあることも分かった。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　客船　〕〔　デッキプラン　〕〔　レジャーライフスタイル　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

西欧先進諸国において、産業革命以前、楽しみのための旅行や保養・社交を目的としたリゾート滞在は、社会の上層階層にのみ可能な「贅沢」の象徴であった。この状況を大きく変えたのが、19 世紀前半の鉄道の登場であり、鉄道を利用したツアーを企画したトーマス・クックに代表されるように、19 世紀以降、旅行の近代化・民主化が始まったというのが、観光学における共通認識といってよいだろう。

しかし旅行の近代化・民主化の一方で、19 世紀半ばに大洋横断の交通機関として登場した客船は次第に、「洋上の宮殿」、「大西洋の貴婦人」といったキャッチフレーズで呼ばれ、「贅沢」を売り物にするようになる。技術的な進歩によって居住空間が大型化しただ

本研究は、近代から現代にいたる社会、特に社会階層とその構造の変化がレジャーライフスタイルの変化に影響を与え、それによって客船内の施設が変化したという影響モデルを想定し、実際の客船施設の変化からレジャーライフスタイルの変化を読み取り、さらに社会変化のパターンと要因にまで遡上することを目的とした。

従来、社会学や経済学などの分野において、上層階層の消費が下の階層に普及する「トリクルダウン効果」や下の階層が上に追いつこうとする「キャッチアップ」によって大衆化が進み、その一方で、大衆化現象に反発する上層階層の差異化・卓越化としての「突き放し」といったパターンが指摘されてきた。

しかし観光研究の分野においては、社会階層ごとにレジャーライフスタイルやその形態が異なるという研究は多いが、レジャーライフスタイルにおいて、「トリクルダウン」や「キャッチアップ」、それに対抗する「突き放し」のパターンが、どのように現われるか、あるいは現われないのか、については、ほとんど研究されてこなかった。

本研究は、階層間移動のメカニズムとしての「トリクルダウン」、「キャッチアップ」あるいは「突き放し」が、近代から現代にいたるレジャーライフスタイルの変化の中ではどのように起きたのか？　あるいは、従来言われてきたパターンとは異なるパターンがあるのか？　を分析することで、観光学の可能性を広げようとしたものである。

オーシャンライナーについては、どのような名船がいつ登場したか、といった視点による歴史的な一般書がほとんどであり、またクルーズシップについての研究では、クルーズ産業の経済効果やマーケティング戦略に関するものがほとんどである。

またオーシャンライナー時代には１等から３等あるいは４等までという客室階層が明確であったが、第二次世界大戦後、クルーズシップへと変化する中でモノクラスへと変化したことは、多くの客船史家が指摘している。が、その社会的背景を踏まえながら、なぜ、どのように、船客用施設が変化してきたのかという実証的研究は、海外においても前例がない。

本研究では、船客用施設の変化は、レジャーライフスタイルの変化によるものと考え、さらにレジャーライフスタイルの変化は、近代から現代にいたる社会階層とその構造変化の影響を受けたという影響モデルをもとに、船客用施設の変化を、社会変化の表象と位置づけた。

そして、オーシャンライナーからクルーズシップへと変化してきた客船の設計図や写真を対象として、船内施設の規模、用途、構造などを分析することで、レジャー・ライフスタイルの変化、ひいては社会変化を明らかにするという研究の構成を組み立てた。

このような視点で、19 世紀からの観光の近代化について、客船の船客用施設の変化を事例とした実証的研究は、諸外国においてもほとんど例がない。

研究者は、すでに「CHANGES IN SOCIAL STRATA ON THE CUNARD’S QUEEN SISTERS」（2004）および「客船における「贅沢」空間の変遷」（2005）で、写真やデッキプランによる分析方法を用いたが、前者の論文では、キュナード社のクイーンメリー、クイーンエリザベス、クイーンエリザベス２、クイーンメリー２の４隻のみを対象とし、また後者の論文では、日本で入手可能な船の写真集やデッキプランを対象とするなど、分析対象としたデータはかなり限定されたものである。

研究成果の概要　つづき

そこで本研究では、船の設計図や写真など膨大なアーカイブコレクションで有名な英国グリニッジのマリタイムミュージアムやリバプール図書館所蔵の船の資料を収集することを企図し、次のような手順で研究を進めた。

１）英国グリニッジのマリタイムミュージアムやリバプール図書館所蔵の客船資料、設計図、写真などを収集する。
２）収集した設計図、写真を年代順に整理する。
３）年代順に整理した資料を、さらに施設別・用途別などに分類し、その変化を分析する。
４）２）および３）から、船客用施設の変化についての時代区分を行う。
５）時代区分ごとに、レジャーライフスタイルの変化を読み取り、背景要因となった社会変化、特に社会階層とその構造変化の関連で考察を行なう。
６）以上の手順を経て、博士論文の一部を構成する主要な論文を執筆する。

英国国立海事博物館所蔵分を含む 26 隻分のシッププランを分析した結果、オーシャンライナー時代の大階段は、1 等船客が着飾った姿を顕示しあう場であったが、クルーズシップになってから再登場した大階段には、上下階をつなぐ構造という、階段本来の機能も、また社会的ステータスを顕示する場としての機能も期待されていないことが分かった。

さらに草創期のオーシャンライナーの食空間では、中世宴会風の長いテーブル、固定式の椅子が用いられていたが、客室階層が分化し始めると、1 等船客用のメインダイニングでは、個別の丸テーブルと椅子によって、他者から距離を置く傾向が見られ、このスタイルが次第に、下層の客室階層へ普及していくというパターンが抽出できた。

これはトゥアン（1982＝1993）が言うように、上位階層による差異化としての機能をもつテーブルマナーが複雑化するとともに、テーブル形状が変化し、個別化の方向に向かうと指摘したのと同じ経過をたどったと考えられるのである。

こうした分析を踏まえ、博士論文では、観光目的の旅や保養・社交目的のリゾート滞在などを含むレジャー・スタイルが上位階層にのみ可能であったという原点からスタートし、「贅沢」を手がかりに、歴史軸と社会軸を組み合わせた視点からの研究によって、社会上層階層のレジャー・スタイルがどのように変化、普及してきた明らかにした。

そして、客船の施設やサービスの変化は、近代から現代に至る社会とその構造変化の表象であると位置づけ、社会や社会構造の変化が、レジャー・スタイルに影響を与え、船客用施設は、その変化に対応するために様々に変化してきたという研究の枠組みを設定した。

博士論文では、観光の大衆化によって、贅沢なレジャー・スタイルがなくなったわけではなく、上位階層の特権的な贅沢としてのレジャー・スタイルの意味は、何らかの形で継続していること。また上位階層の贅沢なレジャー・スタイルが大衆的なレジャー・スタイルのモデルとなったこと、さらに、分かりやすいものしか大衆化しておらず、また見えやすい贅沢から見えにくい贅沢への進展と、顕示的贅沢から顕示されない贅沢への転換という、二重の構造によって、贅沢は、さらに見えにくくなり、階層間格差はますます広がる、という社会構造の分化と統合に関わる指摘を行なった。